

堀合先生に学ぶ(5)

家庭人として、保育者として

立川 多恵子

人が一生をかけて、一つの仕事をやり遂げる。その位尊いことはない。今回は、堀合先生の家庭人として、保育者として生きた長い道程に触れながら、仕事・家庭との関係について考えて見たい。

♡生い立ち

先生は大正十年一月二日、東京赤坂に生まれる。大正デモクラシーの隆盛期であり、先生の生き方の

中に自由なものを感じるのはそのためかもしれないと思ったが、先生のお話では生家は二代続いた建築業であり、学校建築等を広く手がけていた祖父は家族にとつて偉大な存在であり、当時の「家族制度」の厳しさも重なって、家族は戸主である祖父の許可なくしては、何も出来ない状態だった。

したがって先生が女学校に進学する際も学校選別に祖父が関与して、知人が先生をしている家から近

い「青山女学院」が選ばれた。

先生は女学校卒業後も進学を希望したが、「女が勉強して何になる」といった祖父の考え方が優先して、一時は進学を断念せざるを得ない状態だった。

クラスメートの中には津田塾や東京女子大に進む者もあり、先生の進学熱はいやが上にも上がり、それを察して母親が担任に相談して薦めてくれたのが、



◀ 女高師保育実習科卒業後（昭15年）

女高師（現在のお茶の水女子大）の保育実習科だった。修業年数が一年だったので、母が祖父に内緒で進学させた。したがって先生の場合は幼稚園の先生になりたいために保育実習科を選んだわけではない。

入学したのは昭和十三年四月で、前年には支那事変が勃発して、我が国としても風雲ただならぬ時代であり、公立女学校から進学してきた同級生は良妻賢母教育に徹したところがあり、大分固さを感じた。そこへいくと、私学出身の自分が、結構自由な女学校生活を送ることが出来たことを改めて感謝した。

保育実習科時代は附属幼稚園が主な学習の場であり、時間の許す限り保育に携わり、その間本校（女高師）の先生から保育、教育、心理学、音楽、図画、保健衛生等の講義を受けた。倉橋先生には保育学の講義を受けたが、当時の先生は忙しく、ゆっくりお話を伺う機会は少なかった。

堀合先生は実習科時代は余り子どもが好きではなかった。保育実習も、やらなければならぬからやるといった義務的なものだったという。今回先生のお話を伺うまでは、「先生はきっと子どもが大好きで、一生を保育の仕事に捧げたいと考え、保育実習科に進んだに違いない」と思っていたので、「子どもが余り好きではなかった」と言う先生の言葉に驚いた。すでに述べたように、何とかして進学したいと考えた先生は家庭で許されそうな学校として、女

高師の保育実習科を選んだのだ。それがたまたま幼稚園の先生を育てる学校であり、保育実習が義務づけられていて、子どもと出会う機会になったわけである。

♡保育実習科を卒業して

女高師の保育実習科の学生は卒業すると、殆どが幼稚園の先生になって各地に赴任した。同級生の中で一番最初に赴任先に決まったのは、現在十文字学

園女子短大付属幼稚園の教頭職にある桑原先生であり、十九歳で青森女子師範附属幼稚園に主任として赴任している。当時の保育実習科の学生は卒業後直ちに地方の公立幼稚園の主任になって赴任することも珍しいことではなかった。

その頃の日本は世界の中で孤立化して、開戦も時間の問題になっていた。堀合先生の家はすでに祖母が隠居して他所に移り、両親と兄弟だけの家庭になっていた。学校から横浜元町幼稚園を紹介されても通勤が不便だという理由で辞退し、卒業後、更に進学のための勉強を始め、長い間の希望を果たすため、翌年女高師の理科を受験した。しかし残念なことに結果は首尾よくいかなかった。

丁度その頃女高師の附属幼稚園では先生が一人産休に入ったため、恩師から先生に「是非来てくれなにか」という誘いがあり、早速一月から臨時の形で附属幼稚園に勤務することになった。先生が附属幼稚園に正式に赴任したのは、昭和十六年四月からで

あり、この時の恩師の誘いが堀合先生の長い保育者生活のスタートになったわけである。その年の十二月に、日本は米国と戦争状態に入っている。

当時の保育について先生は「あの頃は集めてやらなければならぬことが必ずあり、それに馴れるまで、一生懸命でした」と語っている。先生が初めて保育者になった当時、子どもを集めて指導したという保育内容は、絵を描くこと、歌うこと、おゆりぎ、お話などで、毎日一つか二つではあったが集めて計画的に指導していた。しかし「作ること」だけはその当時から自由な遊びの中で行われていた。

戦争が激しくなると、東京は敵機に狙われ、園児たちは登園しても警戒警報のサイレンが鳴ると、すぐ降園させなければならない日が多くなった。その頃の附属幼稚園の先生方は子どもを帰宅させると、早速シャベルを持って穴掘りをして自分達の手で防空壕を作った。本土空襲が頻繁になると、子どもを帰宅させる余裕もなくなり、子どもと一緒に先生た

ちの手作りの防空壕に体を寄せ合って入る日が多くなったと言う。やがて子どもたちは次々に地方に疎開し始め、東京に残る子どもの数が少なくなると、附属幼稚園も終戦までの半年余りを休園した。そのため先生は本校の学生の勤労働員先に行く準備を始めたが昭和二十年八月の終戦を迎えた。

戦争が終わって、二か月後、附属幼稚園は再開された。附属幼稚園の再開は「隣保幼稚園として、近所の子を集めての再開」であり、ご近所幼稚園としての発足だった。

戦前の附属幼稚園は遠方から付添いの人に送られてくる子どももあり、一種のエリート幼稚園だったが、再開間もない時期には近所の子を集めての出発だったわけである。しばらくすると、地方に疎開していた子どもたちも帰ってきて、両者が一緒になって園生活を送ることになる。

敗戦によって日本の学校制度が大幅に改革され、戦後は幼稚園も学校制度の中に組み入れられること

になる。したがって保母の再教育のために各地で認定講習が始まった。堀合先生もこの講習を受けるため熱心に通い、この時、講師の倉橋先生から改めて保育を学んだ。先生はその後になって自分の保育実践に疑問を感じると、その認定講習での倉橋先生の講義ノートを開き、確かめたり、考えたりした。そのため先生の講義ノートは鉛筆で書いた字がこすれてしまっ、すっかり真っ黒になったと言う（もともと当時のノートは紙質が悪く、鉛筆の芯もさらさらしていた……）。

◇先生の結婚

長い混乱の時代が続いた戦後、先生は縁あって、エンジニアの御主人と結婚した。戦後何年も経っていない時期なので、「よい方がみつかりましたね」と話すと、先生も率直に「そうなんです。私の年頃の女の方は、相手が戦死したりして、配偶者探しが大変だったのです。結婚できたのは幸いだったかも

しれません」と笑っていた。したがって先生が長男を生んだのは、三十代になってからである。

子育ては同居していた先生の母親が手伝ってくれ

◀ お店やさんごっこ（昭27年）



たので、産休もそこに仕事を続けることができ
た。先生はわが子を育てながら、そのエネルギーの
大きさに驚き、園でも子どもがもっと自由に遊べる

◀ お茶大附属幼稚園の先生方と（昭28年）



ことを願った。ある日クラスの子どもと一緒に遊び
回ってジャングルジムに上がって見たら、園庭は先
生のクラスの子どもだけになっているのに驚いたと
いう。

私が初めて先生の保育を見たのは児童学科の学生
時代だったが、二十年前、保育者養成の仕事に従事
して、久しぶりで先生の保育を見たことがある。そ
の日先生はホールに子どもを集めて、スキップなど
をさせていた。私は当時の附属幼稚園の園長先生に
「リズム的なものは集めて指導するのですか」と聞
いた。園長先生は「その方が能率がいいからです
よ」と答えた。この言葉はその後も長く疑問として
私の耳に残っていたが、まもなく附属幼稚園ではリ
ズムも子どもをホールに集めて指導することはなく
なった。今回、先生にその頃のことを思い出して質
問したら、先生は「そうなんです。その頃、私もい
ろいろ考えていたのです。だってリズムだけは集め
てやらなければならないということはないでしょ

う。ブランコする時でも、リズム的なことはいろいろ経験できるのですもの」という。先生はこうして長い時間をかけ、園生活での子どもの自由を保障していったと考える。

先生に子どものエネルギーの大きさを知らせた長男は大学を出ると、浜松に本社のある楽器のメーカーに就職し、結婚して、現在二人の子どもの父親になっている。したがって保育の場では仕事オンリーの若々しい先生も休みになると、浜松まで孫の顔を見に行く優しいおばあちゃんである。

△若さを保持する

私は堀合先生の保育しているのを見てもしばしば若いこと、動きが軽やかなのに感心する。その秘密がどこにあるのか是非知りたいと思っていたが、先生の友達の一人から「堀合さんは日本舞踊の名取よ」という話を聞いて「なるほど」と思ったことがある。

その時、私は先生が東京出身の人と知っていたので、きつと小さい時から日本舞踊の稽古をしていたためだろうと考えていたが、今回このことについて改めて伺うと、五十歳になってから民謡を踊ることから入ったという。動機は、先生の恩師であり、長くお茶の水女子大で学校ダンスを指導していた戸倉ハル先生と一緒に、よく幼稚園の先生の講習会でおゆうぎを教えていたが、その折、戸倉先生が学生たちと楽しそうにダンスを踊るのを見て、すっかりあこがれてしまい、自分も何らかの形で大人の踊りが踊れるようになりたいと考えたのである。

たまたま先生の家の近くに花柳徳兵衛の道場があったのを幸いに、その講習に夜通ったが、徳兵衛先生はまもなく亡くなられ、やがて道場が閉鎖されると、高弟の開いた中野や、八王子の稽古場に通い、本格的に花柳流門下に入門し、仕事の合間を見て熱心に稽古に励んだ。その結果先生は三年で名取になっている。

先生は恩師へのあこがれから、ある時はバレエの稽古もやってみたが、年齢を考えて、日本舞踊に力を入れることにした。高年齢になってからの入門であり、本格的な日本舞踊を始めるには、多少の躊躇があったので、民謡を踊ることから始めたわけだが、今ではすっかり日本舞踊の面白さに魅了され、時折舞台上立つこともある。

先生が日本舞踊に打ち込んだことが、若さを維持する原動力になっているとしたら、こんなに嬉しいことはない。「保育者は体を動かすことを苦にしない」この言葉は先生の口癖であるが、保育の場に見られる先生のリズムカルな動きが日本舞踊を学ぶことによっても保持されているとしたら、先生の趣味が保育者としての長命を支えていることになる。

まとめ

人はこの世に生を受けて、自分の力を十分生かすことの出来る仕事に出会えることほど幸せなことは

ないだろう。堀会先生の場合それが保育の仕事であったと考えられる。

先生は何時でも人生に前向きに進んでいるが、無理はしていない。どちらかというと、与えられた場で、地味な努力をしている。それが先生の生活姿勢でもある。その生活姿勢が先生をして懸命に保育の道を歩ませたのではないかと考える。

先生は仕事と家庭を両立させた。例え仕事と家庭を両立させていても、多忙な余り大人本位の能率主義をとる人もいる。しかし先生は家庭でも、仕事でも、対象に忠実なるがゆえに、子どもから学ぶ姿勢を忘れていない。その結果先生の保育の道は倉橋先生が主張する子ども側に立つ保育を実現するための長い道程にもなった。

(十文字学園女子短期大学)